

今、対話による美術鑑賞が全国各地で行われています。対話による美術鑑賞とは、作品に対する自分の見方、感じ方や考え方を対話を通して深めたり広げたりしながら集団で意味生成していくことです。

そして、小・中学校の現場でも、教師の解説を一方的に聞くのではなく、子ども自身が主体的に発言をし、対話をしながら作品に対する見方や価値意識を深めていくような授業が行われるようになってきています。

対話による美術鑑賞の実践と研究に長年取り組んでおられる上野行一先生（帝京科学大学教授）の著書『私の中の自由な美術』では、具体的な美術作品を例に挙げながら、子どもたちが対話しながら作品の見方や考え方を深めていく様子が紹介されています。また、弊社ホームページでは「対話による鑑賞授業 Q&A」「美術鑑賞を楽しむ6つの手がかり」というコーナーを設けております。ぜひご覧いただき、授業にお役立ただければと思います。

●光村図書ホームページ 中学校美術
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasyo/chugaku/bijutu>



対話による美術鑑賞の授業場面。「風神雷神図屏風」について、意見を交流する先生と生徒たち。

撮影 松岡芳英



『私の中の自由な美術』
 上野行一著 光村図書出版 2011年
 本体1,900円＋税

カラーで国内外のさまざまな美術作品を掲載。対話を通して、それらの作品の見方や考え方がどう深まっていくのか、わかりやすく解説している。

美術準備室 No.4

2013（平成25）年11月7日

発行人 ■ 常田 寛
 発行所 ■ 光村図書出版株式会社
 〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
 電話：03-3493-2111
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>
 E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
 デザイン ■ Better Days (大久保裕文+武井糸子)
 印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社

2013

美術準備室

つ く る ・ み る ・ 感 じ と る

第 4 号

光村図書



特集

表現と鑑賞を行き来する

アトリエ訪問

前衛芸術家

草間彌生

作家の肖像

美術家 横尾忠則

子どもの世界をとらえる

「傘」

放課後ART

●栃木県小山市立小山中学校

●とよた子ども造形フェスティバル

この1点

「タンギー爺さんの肖像」南 伸坊



ア ト リ エ 訪 問

第 4 回

草間彌生

前衛芸術家

ニューヨーク、ロンドン、リオデジャネイロ、上海……。
今、各国で草間彌生の個展が開催されている。
世界中から熱い視線が注がれる「水玉の女王」は、
日夜大きなキャンヴァスに向かい、制作に打ち込んでいるそうだ。
その現場へうかがった。

撮影 永野雅子

都心の住宅街に、コンクリートとガラスのモダンな3階建てのビルがある。「草間彌生スタジオ」——水玉の女王の秘密基地だ。スタッフに導かれて、2階のアトリエに入ると、色とりどりの作品に囲まれた草間さんがじっとキャンヴァスを見つめていた。声をかけることがためられるほどの、圧倒的な集中力で筆を走らせている。

——毎日、朝から夜までずっと描いておられるそうですね。疲れて投げ出したくなることはないのですか。
草間 ええと……、我慢しています（笑）。疲れますけど、死ぬまでもっともっといい仕事をしなければならんと思っています。私は、この大きな絵を1〜3日で仕上げます。そして、1枚描き終えたら、すぐ次の作品に取りかかります。アイデアがどんどん出てきますから。本当はこうしてインタビューを受けている間も制作したくてたまらないの。あの……ちょっとよろしいですか。（と言いながら、再び筆に絵の具を付け、描き始める。）

——下絵を描かずに作品に取りかかっていらっしゃるんですが、頭の中にイメージがあるのでしょうか。
草間 筆を持つと、手が勝手に動いていくんです。だからね、私の手に聞いてください（笑）。私は一度も作品を失敗したことがないんです。迷うこともない。すべて自分の思う



優しい声でささやくように話す草間さん。インタビュー中、自作の詩を朗読してくれた。



とおりにできあがってくるんです。不思議よね。
——素晴らしいですね。現在、取り組まれているのは、2009年より始まる「わが永遠の魂」という絵画シリーズですが、作品数はすでに200点を超えていると聞きました。
草間 私がいっぱい描くから、アトリエに作品の置き場所がなくなってしまっ。実は、この近くに美術館を建てているので、そこにも所蔵しようと思っています。

今、私の作品は、いろいろな国の美術館に貸し出されていて、うちのス

タッフは世界中を飛び回っていますよ。私はここでずっと絵を描いているだけですが、彼らは外へ出て、私ができないことをどんどんやってくれています。スタッフは全員で9名いますが、25年以上いっしょに働いている人が3名います。みんな、私の影の仕掛け人なの（笑）。
——信頼するスタッフに囲まれて、制作への意欲も高まりますね。
草間 ええ。今までさまざまな苦労をしてきましたが、ここにきて、私の人生における芸術の力が集結して、一つになろうとしています。ですから、毎日一刻を惜しんで制作しなければならんと思っています。
——草間さんの作品は、中学生に

とても人気があります。子どもたちにメッセージをお願いできますか。
草間 人間のすばらしさや宇宙の神秘など、すべてのことに興味をもって、絵でも小説でも何でもいからです、一生をかけて大きなメッセージを、世界中に伝えていってほしい。私は、自分が死んだ後も皆さんに見ていただけるように、全力を尽くしてすばらしい作品を残していこうと思っています。

私は子どもの頃から、将来、芸術家になりたいと思っていました。そして今もなお、「生まれ変わっても芸術家になりたい」と思っています。創作の力が私のすべて。だから、命がけで描き続けます。



絵の具をたっぷり付け、どんどん筆を走らせる。その動きに、迷いはまったくない。



画材は乾きの早いアクリル絵の具を使う。「でもね、乾くのが待ちきれないの」。



くさま・やよい
長野県生まれ。
10歳の頃より水玉と網模様をモチーフに、幻想的な絵画を制作。
1957年に渡米し、60年代後半には多数のハプニングを行う。
73年に帰国し、小説、詩集も多数発表。
2011年より大回顧展が、テート・モダン、ポンピドゥーセンターなど欧米4館で開かれ、大きな話題となった。
12年より個展「永遠の永遠の永遠」(国立国際美術館、大阪)を開催。
日本全国を巡回し(2013年11月2日〜2014年1月13日には、高知県立美術館で開催)、記録的な入場者数となっている。



特 集

表現と鑑賞を 行き来する

学習指導要領では、
「表現」と「鑑賞」の関連を図ることが重視されています。
表現活動が鑑賞に生かされ、鑑賞活動が表現に
生かされていくよう、指導計画を工夫していく必要があるでしょう。
本特集では、「名画に入り込もう!」という、表現と鑑賞が
密接に関連した授業をご紹介します。
生徒たちは、絵画作品を鑑賞し、模写していきます。
さて、どのような作品ができあがるのでしょうか。

撮影 鈴木俊介

授 業 リ ポ ー ト

名画に入り込もう!

千代田区立^{く だ ん}九段中等教育学校

落合良美^{お ち あ い よ し み}先生 小野征一郎^{お の せ い い ち ろ う}先生

2年2組 (生徒数38名)

九段中等教育学校は、東京都千代田区立の中高一貫校。緑に囲まれた大きな校舎で6学年の生徒たちが学ぶ。校内に足を踏み入れると、廊下にはたくさんの生徒作品が掲示されている。特に目を引くのが名画を模写した作品だ。葛飾北斎の「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」、ダリの「記憶の固執」など、教科書にも掲載されているような作品が並ぶ。それらをよく見てみると、なんと作品の中には作者である生徒の写真が貼り込まれている。

「絵画作品を模写した後、自分の写真を貼った作品です。この『名画に入り込もう!』という実践を始めて、今年で7年目になるんですよ。そう話すのは落合良美先生。毎年、2年生は5月頃からこの作品制作に入り、9月の文化祭でお披露目するらしい。今回、その授業を取材させてもらった。



教科書や画集の中から、自分がいいなあと思う作品を選んでごらん、と小野先生。

STEP 1

なぜ絵に入り込むのか

「皆さんには、これから文化祭に向けて制作をしてもらいます。廊下に3年生の先輩が昨年描いた作品が掲示されていますよね。あのように好き

な絵画を模写し、その後、自分の写真を貼り込んで、作品をつくってもらいます」。落合先生はそう切り出した。

そして、ティームティーチングで落合先生といっしょに指導している小野征一郎先生が、教科書や画集に掲載されている絵画を生徒たちに見せる。「これからみんなに絵画作品を一つ選んでもらいます。画集を一冊ずつ渡しますので、1分間見たら、後ろの席の人に回してください。そうやって順番にいろいろな画集を見ていきましょう」。

画集を手にした生徒たちは真剣な表情でページをめくっていく。全員



「この絵、描くのが難しそう」「チャレンジしてみれば?」。友達と意見を交わしながら絵を選ぶ。



「うーん、どの絵にしようかな」。さまざまな画集を見ながら、どの作品にするか決める。



森村氏の作品をモニターで鑑賞しながら、絵の中に入り込むことの意味を生徒たちに捉えさせる。

が画集を見終わったら、画集を机に置いて自由に歩き回り、自分が描いてみたいと思う作品のページに付箋紙を貼る。「選んだ絵とは文化祭まで向き合っていくことになります。だから、自分が心から『いいなあ』と感じた作品を選ぶようにしようね」と先生がアドバイス。

作品が決まったら、作品名・作者

名・選んだ理由をワークシートに記入させ、何人かの生徒に発表させた。井上直久の「ジパングの虹」という幻想的な作品を選んだ生徒は「一枚の絵の中で、雨が降っているところと、晴れているところがある。いろんな色が使われて一見ゴチャゴチャしているけど、なぜか見ていてホッとする絵です。この不思議な世界に

向き合いたいと思って選びました」と発表。生徒によって作品選びの視点がさまざまで、おもしろい。

次に先生は、美術家・森村泰昌^{やすまさ}氏の著書『「美しい」ってなんだろう』（理論社）の一節を紹介した。

森村氏はゴッホの絵に「なる」ことで、ゴッホの気持ちや作品に込めた思いを深く感じ取っていったことを話し、実際に森村氏の作品をモニターに映して見せた。生徒たちは、「わあ!」「おもしろい」「ちょっと気持ち悪いかも(笑)」などと、一気に盛り上がる。

先生は、今回模写した作品に自分の写真を貼り込むのも、森村氏と同様の意図があると告げた。「自分が絵の中にどのように入り込むか考える過程で、作者の気持ちを考えたり、作品をより深く味わってほしいなと思います」。

次時より、いよいよ制作に入る。

STEP 2

絵の中を「散歩」する

まず、生徒たちが選んだ作品をカラーコピーしたものが配布された。生徒たちが扱いやすいよう、A4判でラミネート加工がされている。

「これから、みんなにはこのコピーを見ながら模写をしていってもらいます。制作に入る前には、毎回必ず『1分間散歩』という時間を取ります。1分間、自分が選んだ絵の中を散歩して、その中で気づいたこと、見たこと、感じたことをメモしていきますよ」。落合先生はそう話し、ワークシートを配布した。

毎時間、模写する前に作品を1分鑑賞する時間を設ける。それを落合先生は「1分間散歩」と名づけた。今回の授業では、計5回の「散歩」が行われる。散歩するときは、毎回視点で絵に入り込むことで、作品世界をより深く感じ取ることがねらいだ。

例えば、Y君(右写真)。選んだ作品は、ピカソの「三人の音楽師」だ。最初の散歩では、小さくなって絵の中に入った。「いろいろな形があっ

て、部分的に見ると人の形に見えない。でも散歩していくと形が融合して人に見えてきた」とワークシートにメモしている。3回目の散歩では大きくなって絵全体を見渡すように散歩した。そして「指揮者が手を振っているのが見えた」とメモしている。小さくなったり大きくなったりして絵の世界に入り込むことで、人の形に見えなかったものが人に見え、さらに作品には描かれていない指揮者の存在まで感じ取ることができた。

いっぽうHさん(ページ下)は、ゴッホの「ひまわり」を散歩する中で、作品には描かれていない太陽や青空を感じ取った。そして、太陽に向かって咲くのびやかなひまわりを描いていった。



1分間集中して作品を見つめ、その中を散歩する。



上／1分間散歩で見たことや感じたことを発表。 右下／散歩して気づいたことなどをワークシートにメモ。 左下／「三人の音楽師」をどう散歩したか発表するY君。

授業展開 (全14時間) 生徒の活動

第 1・2 時 導入・作品選び

- 昨年度の2年生が制作した作品を見て、イメージをもつ。
- 教科書や画集から、好きな作品を選ぶ。

第 3 時 鑑賞

- 森村泰昌氏の作品を鑑賞し、絵画に入り込むことの意味を考える。
- 制作手順を確認する。

第 4-12 時 鑑賞・制作

- 自分が選んだ作品をさまざまな視点から鑑賞する。
- 模写をする。

第 13・14 時 撮影・完成

- 作品にどう入り込むか決め、写真撮影をする。
- 自分の写真を作品に貼り込む。

指導計画

準備するもの

生徒 教科書,筆記具

教師 森村泰昌氏の作品や著書,画集,作品のカラーコピー,トレーシングペーパー,ケント紙,マスキングテープ,アクリル絵の具,綿棒,画材各種(コースゲル,モデリングペーストなど),デジタルカメラ,ワークシート

学習目標

- 自分が選んだ絵画を,さまざまな視点から鑑賞することができる。
- 自分なりに鑑賞したことを踏まえ,それを作品に表現することができる。

評価規準

- 積極的に作品制作に取り組んでいる。(美術への関心・意欲・態度)
- 作品のどこにどのように入るか,またそこから生まれる物語について想像を膨らませ表現している。(発想や構想の能力)
- 模写を通じ,混色・ぼかし・筆使いなどの技法や,画材の多様な表現方法を理解し,実践している。(創造的な技能)
- 作品の中に自分が入ることで,作者の制作意図や心情を読み取り,作品について自分なりの感想をもっている。(鑑賞の能力)

Hさんの1分間散歩

ゴッホ「ひまわり」※

1 回目 小さくなって散歩

自分が小さくなって、絵の中を自由に散歩しましょう。

「一つ一つの花の形が違う。意外と大きく咲いていて立派だった。季節は夏で、空は青い」

2 回目 隣の人の絵の中を散歩

隣の人と絵を交換して、隣の人の絵の中を散歩しましょう。

(隣のM君より)
「花瓶にゴッホのサインがあるのを発見した」

3 回目 大きくなって散歩

自分が大きくなって、絵全体を見渡して散歩しましょう。

「太陽に向かって力強く花が伸びている。とてもきれいだ」

4 回目 時間を変えて散歩

その絵は何時頃の絵でしょうか。その12時間後に散歩しましょう。

「この絵は午後3時ぐらいだと思う。12時間後は深夜の3時。花たちは夜が嫌いだからしぼんでしまう」

5 回目 絵を逆さまにして散歩

絵を180度回転させて逆さまにした状態で散歩しましょう。

「ひまわりの花たちが、花瓶に吸い込まれているようだった」

一つ一つの花が夏の太陽の光を浴びて伸びていると感じたHさん。のびやかで力強いひまわりを描いていく。



※1889年制作 ゴッホ美術館(アムステルダム)蔵の作品



特集
表現と鑑賞を
行き来する

STEP 3

模写をする

模写は右の【模写の流れ】の手順で行う。絵の具は、アクリルを使う。生徒たちは1年生のときに使ったこ

とがあるので、「重ね塗りができる」「乾くと耐水性になる」などの特長について、まず全員で確認。そして、先生が「水を多めに混ぜると色が薄くなり、塗っても輪郭線が透けて見えます。初めに薄く色を塗って、その上から濃い色を重ねていくといい

ですよ」とアドバイスした。

筆を持つと、生徒は真剣な表情で、黙々と作業を進めていく。模写は作者の制作過程を追体験する表現活動でもある。何度も色をつくり直し、作品の色味に近づけようとする生徒、作品の細部をじっと見つめながら慎



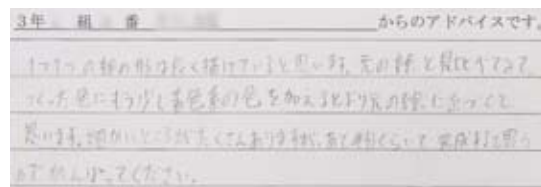
制作中、友達と作品を見合う。

先輩からのアドバイスシート



制作途中の作品をカラーコピーして貼り付ける。

先輩からのアドバイス欄



作品から想像した物語を800字以内で書く。

制作途中の作品を見て、物語を読んだうえで3年生がアドバイスを記入。昨年同じように模写して作品をつくった3年生からは、具体的なアドバイスが書き込まれる。

模写の流れ



作品の上にトレーシングペーパーを仮留めし、輪郭線を写し取る。



輪郭線をなぞってケント紙に写す。



作品をよく見て、絵の具を混ぜ合わせて色をつくっていく。



教科書の掲載作品は教科書の色も見ながら、着彩していく。



ぼかしたい部分は綿棒などを使う。

重に筆を進める生徒など、それぞれに作品と向き合い、模写を通して絵の世界に入り込んでいく。

先生は、「ここは綿棒を使ってぼかしたほうがいいよ」、「もう少し水を多めに混ぜて薄く色を広げてごらん」など、机間指導をこまめに行う。また、コースゲルやモデリングペーストなどの画材を絵の具に混ぜると、ザラッとした表現や質感のある表現ができることを告げ、必要があればそれらも使うよう指示した。

また、制作の過程で、自分の作品を3年生の先輩に見せてアドバイスをもらうという活動も行う。台紙 (P8参照)に、制作中の作品のカラーコピーと、作品から想像を膨らませて書いた物語の文章を貼り、それを3年生に渡す。先輩はそれを見て、アドバイスを記入。昨年度同じように制作した3年生からは「色を塗るときに同じ方向へ筆を動かしたほうがいい」「物語を読んだけど、もう少し静かな世界観を表現できたほうがいい。色を暗めにしてはどうか」など、具体的なアドバイスが書かれている。

「わあ、先輩からだ」。生徒たちは、アドバイスシートをうれしそうに読んでいる。身近な先輩からの心の込められた助言は、きっと作品にも生かされていくことだろう。



試行錯誤を繰り返し、色をつくっていく。

STEP 4

絵の中に入り込む

模写が終わると、いよいよどのように絵に入り込むかを決める。

生徒たちは1分間散歩をしたり、模写したり、物語を書いたりする中で、作品を深く鑑賞してきた。最終的に入る場所、ポーズ、大きさを決めたら、いよいよ写真撮影だ。Nさん (ページ下) は、絹谷幸二の「正夢・一富士二鷹三茄子」という作品に入り込む。太陽をバックに大きな鷹が富士山をキッとにらみつける迫力ある絵だ。Nさんは1分間散歩で、太陽の強い光を感じたり、自分が大きくなって富士山を見下ろしたりした。そして、鷹の背中に乗り、そこから富士山を見てみたいと考えた。

写真撮影では、先生と相談しながらポーズを決めていく。鷹の上に乗ったとき、元気よく手を挙げたポーズがいいのか、鷹にしがみつくようなポーズがいいのか、さまざまなポーズをデジカメで撮影し、イメージを固めてい

く。最終的に、鷹の背中にしがみつ

き富士山を見下ろすポーズに決めた。写真を先生にプリントしてもらい、丁寧に自分の姿を切り抜いていく。そしてついに、写真を作品に貼り込む作業。Nさんは、薄くのりを付けた自分の写真をそっと鷹の背中に乗せた。微妙に角度を調整した後、ぐっと力を入れ写真を作品に押し付ける。その瞬間、作品の印象が少し変化したような気がした。Nさんが入り込んだことで、作品がさらに生き生きと動き出したのだ。

何時間にもわたり鑑賞と模写を繰り返してきたが、ついに作品が完成。Nさんから満足そうな笑みがこぼれた。文化祭で展示されるのも楽しみだ。



作品に入るときのポーズを友達と相談。

Nさんの写真撮影・貼り込み

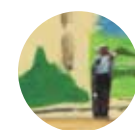


①鷹の背中に乗ることは決まったが、どのようなポーズにするか、先生に相談。②撮った写真を丁寧に切り抜く。③写真を作品に貼り込む。緊張の瞬間。④ついに作品が完成!



どうやって絵に入る？

1分間散歩や模写をする中で、何度も作品世界に入り込んできた生徒たち。
さて、最終的に絵のどこにどんなポーズで入るのでしょうか。



特集
表現と
鑑賞を
行き来する

S君

選んだ作品
「渚の白馬」かい い 東山魁夷



ちょっとこだわり派のS君。集中して制作する。

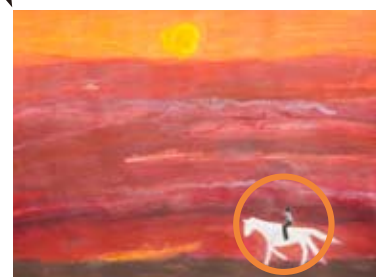


美しい波を表現するため、細い筆で線を引いていく。1分間散歩では、作品には描かれていないカモメや漁をする人々を見たそうだ。

馬といっしょに、
この海沿いを
走ったら
楽しそう。



馬にまたがるポーズに決めた。手をどうするか検討中。



馬にまたがり、手を上げて
颯爽と浜辺を走る S 君。



Oさん

選んだ作品
「大きなテーブル」ルネ・マグリット



美術部の O さんは、絵を描くのが大好き。



「この絵は上と下で違う時間が流れていると思う。上は夕方では朝」と話す O さん。この幻想的な世界にどう入り込むのか。

この不思議な
島に流れ着いた
漂流者にな
りたいな。



浜辺に流れ着いたことを表現するため、うつ伏せのポーズ。



マグリットの不思議な
世界に漂流した O さん。



Hさん

選んだ作品
「二つのバラ」ルネ・ジェニー



いつも丁寧に作品を仕上げる H さん。

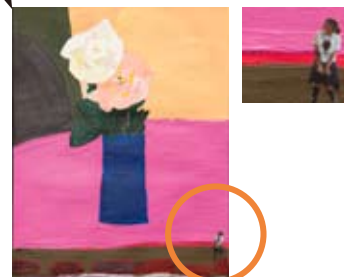


作品を見つめ、色合いを確認。1分間散歩では、「このバラは造花かもしれない。本物と造花、どちらなんだろう」と思ったという。

この作品は
花が主役。
バラを見つめる
ような場所に入
りたい。



バラを見上げるポーズ。首の角度をしっかりと確認する。



机のふちに腰かけ、バラを
じっと見つめる H さん。

いよいよ、文化祭！

九 段中等教育学校では、毎年9月に九段祭が行われます。合唱・演劇・ダンスなど、6学年の生徒たちが日頃の活動の成果を披露し、非常に活気のある文化祭です。

今回「名画に入り込もう！」の授業で制作された作品は、額に入れ廊下に掲示。大人から子どもまで多くの人たちが足を止め、作品に見入っていました。制作した生徒たちは、その様子をはにかみながら見守っていました。



制作した生徒たち。
作品の前で、先生とパチリ。



クラスメイトの作品に見入る。



「あっ、ここに人がいる!」。
作品の中に貼り込まれた写真に気づき、指さす子どもたち。

ジャンプするのが好きだから、この作品の中を飛んでみたいと思った。全体を見渡せる太陽の中に入りました。



K君



選んだ作品
「晨」沢 宏毅



選んだ作品
「水辺の朝」東山魁夷

とげとげしい草に囲まれた寂しそうな場所にいる馬。そんな馬を遠くから優しく見守りたいと思いました。



N君



Iさん

この絵は日の出の場面だと思う。山頂で朝日を感じたいと思い、強い光がまぶしいというポーズにしました。



選んだ作品
「暁」和田英作

授業を終えて ——自分の見方で作品を鑑賞してほしい

この「名画に入り込もう！」は、本校に赴任してからずっと続けている実践です。今年は新たに「1分間散歩」という活動を取り入れました。自分なりの見方で作品を鑑賞するおもしろさをもっと感じてほしいと思ったからです。生徒たちはこの活動によって、「冷たい風が吹いていた」、「海の向こう側に島が見えた」など、絵には描かれていないことも見たり感じたりし、作品世界にどんどん入り込んでいきました。そのためか、最終的に絵のどこに入るかを決めるとき、「ここに入りたい」と迷いのない子が多かったように思います。

模写をするのには時間がかかります。作品と向き合いながら、何度も色をつくり直したり、色合いを見ながら慎重に色を重ねていったり……仕上げていくのには根気が必要です。大変かもしれませんが、作品ができあがったとき、生徒たちは「ここまで自分は描けるんだ」「作品に愛着をすごく感じる」「達成感がある」などと話していました。真剣に作品と向き合い、制作していったからこそ、こういう言葉が出てきたのだと思います。この授業では、作品制作にじっくり取り組む喜びも感じてもらえたら、うれしく思います。



小野征一郎
おの・せいいちろう

落合良美
おちあい・よしみ



光村図書中学校『美術』の著作者である上野行先生に、今回の授業を参観していただきました。

授業を参観して



上野行一
うえの・こういち

大阪府生まれ。帝京科学大学教授。大阪教育大学大学院修了。広告デザイナー、公立学校教諭、高知大学教育学部教授を経て2010年より現職。著書に『私の中の自由な美術』（光村図書）など。NHK 高校講座「芸術（美術Ⅰ）」の番組の監修を務める。光村図書中学校『美術』教科書の著作者でもある。

主題を生み出す鑑賞 「1分間散歩」

「名画に入り込もう！」の授業は、絵を鑑賞して模写し、自分の写真を貼り込んで作品をつくり、学校行事の九段祭（文化祭）に展示することをねらいとしています。6年間一貫教育の中等学校ならではのユニークなカリキュラムであり、教科書の題材を実践した授業ではなく、どここの学校でも実践できるものではないということをお断りしておきましょう。

模写をすることは作者の表現過程を追体験することです。しかしそれは作者の表現をそのままどる行為ではありません。「ここはどのような手順で描いたのかな」「この色はどうしたらつくれるだろう」「これはいったい何を表しているのだろう」と自分なりに作品と向き合い、自問自答し、自分の解釈で表現する行為です。言い換えれば模写とは、作品に対する自分なりの鑑賞を手がかりにして、自分なりの表現を組み立てる行為といつてよいでしょう。

とはいえ模写するだけでは、学習指導要領のA表現（1）で示されている、主題を生み出すことや創造的な構成を工夫するなどの発想・構想に関する事項の指導につながりません。模写をしながら感じ取ったことや考えたことをもとに、生徒たちが主題を生み出すための〈学びのしかけ〉が必要なのです。

この授業では模写を終えた段階で自分の写真を貼り込むという〈学び

のしかけ〉が設定されています。模写をもとに強く表したいことを心の中に思い描けるようにし、ポーズや表情を考え、どこにどのように自分を入れるかを生徒たちに考えさせるのです。

そのためには意図的な鑑賞が欠かせません。

落合先生と小野先生の授業では、毎時間「1分間散歩」と称して絵の中に入り込む時間が設けられています。

しかも「小さくなって絵の中に入り、自由に散歩しましょう」とか、「大きくなって空から絵全体を見渡してみよう」とか、「その絵は何時頃の絵でしょうか。絵の時刻を決めたら、その12時間後に散歩してみよう」などと、毎回違う視点で絵の中を散歩するのです。

たとえば、ルネ・ジェニーの「広大な青さ」に小さくなって入り込んだ生徒は、手前に描かれた砂浜を掘り起こし、砂の中に小さな貝を発見しました。また鳥になって空から対岸に近づいてみると、描かれた山に登山者がいることに気づきました。しかし、貝も登山者も実際には描かれていません。絵の中を散歩した人だけが知ることのできる秘密を、絵が教えてくれたのです。

小さくなったり鳥になったりして何度も絵の中に入り込み、散歩を繰り返すことによって、絵はしだいに生徒にとってなじみ深い存在になります。こうして写真を貼る段階では、もはやその絵は生徒自身の作品になっているのです。



特集
表現と
鑑賞を
行き来する

作家の肖像

第 4 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1936- 横尾忠則

よこお・ただのり
1936年兵庫県生まれ。美術家。
ニューヨーク近代美術館、ステ
デリック美術館、カルティエ現
代美術財団など国内外の美術館
で個展開催。パリ、ベネチア、
サンパウロなどのビエンナーレ
に出品。小説『ぶるうらんど』
では泉鏡花文学賞受賞。2012
年、神戸市に横尾忠則現代美術
館、13年、瀬戸内海の豊島に
豊島横尾館が開館。毎日芸術賞、
紫綬褒章、旭日小綬章、朝日賞
など受賞多数。

ジャズピアニストのような人

「これから行ってもいいかな」。横尾さんはそうやっていつも突然電話をくれ、私の勤務する世田谷美術館へ自転車ですらりとやってきます。

思い返せば、私が当館に赴任して最初の訪問客も横尾さんでした。「館長就任のお祝いだよ」と、ご自身がパッケージデザインをしたお酒の箱を抱えてやってきました。でも、箱を開けてみたらお酒の瓶は入っていない。純粋にパッケージの箱をプレゼントしてくれたんですね。横尾さんらしいなと、うれしくなったのを覚えています。

2008年には当館で「冒険王・横尾忠則」という大規模な展覧会を開催しました。私は、横尾さんの制作のプロセスも紹介したいと思ったので、ポスターのアイデアスケッチや色指定紙なども合わせて展示しました。また、会期中に公開制作を行ってもらったのですが、こちらもたいへんすばらしかった。横尾さんは、その場の空気やお客さんが発するものを全身で感じ取って、それを作品に取り込むことのできる人です。即興で演奏するジャズピアニストのようだなと思いました。

「横尾劇場」

彼の描く絵は、どことなく演劇的な空間を想像させます。舞台があり、ストーリーがあり、役者がいる。私たちは、その「横尾劇場」を見ている観客です。

私が彼の作品の中でいちばん好きなのは、『ジュール・ヴェルヌの夢』。冒険的ロマンや少年がもつ純粋な心を感じさせてくれます。とはいえ、

けが汚れない作品という意味ではありません。横尾さんの作品には、必ず怪しくていかがわしい空気がただよっています。しかし、その空気があるからこそ、この作品では少年の純粹さが魅力的に浮かび上がっているのだと思います。

また最近、横尾さんは『日本の作家222』という画集を発行し、私も寄稿させていただきました。このシリーズ也非常におもしろい。柴田錬三郎、松本清張など、怪物のような作家たちを見事に描ききっています。作家ごとに色使いや構図などの描き方が異なり、並べて見てみると圧巻です。

天賦の才能

彼は高校卒業後すぐに印刷会社へ就職したため、美術学校でアカデミックな技法を学んだわけではありません。しかし、美術への造詣は驚くほど深い。おそらく、一つ一つ自分の目で確かめて、会得していったのでしょう。また、三島由紀夫、三宅一生など、交友関係が幅広く、そこからさまざまなことを吸収し、次々と作品に生かしていった。とはいえ、彼は決して野心家ではないんです。ごく自然に生きてきた結果、そうなったという感じなんですね。だから横尾さんの仕事は、誰もまねすることができません。天賦の才能がなせるわざなのだと、私は思います。(談)

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



上／『ジュール・ヴェルヌの海』
キャンヴァス アクリル、コラージュ 227.3×181.3cm
2006年 世田谷美術館蔵

左／『JASRAC』のポスター
シルクスクリーン 103×72.8cm 1988年
日本音楽著作権協会 ニューヨーク近代美術館蔵

右／日本の作家
キャンヴァス アクリル 各33.4×24.3cm
左から順に、柴田錬三郎(2007)、三島由紀夫(2007)、松本清張(2007)

このコーナーでは、教科書に掲載されている生徒作品を取り上げ、奥村高明先生に、その作品の見方や考え方を紹介いただきます。

奥村 高明
おくむら・たかあき
聖徳大学児童学部教授。
1958 年宮崎県生まれ。
小・中学校教諭、美術館学芸員の後、
文部科学省教科調査官として
学習指導要領の作成に携わる。
専門は図画工作・美術教育、
鑑賞教育など。芸術学博士（筑波大学）。
『子どもの絵の見方～子どもの世界を
鑑賞するまなざし～』（東洋館出版社）、
『美術館活用術～鑑賞教育の手引き～』（
美術出版社）など、著書多数。

1. 作品からわかることは1割

大人は大人になってしまったがゆえに、子どものことがわからなくなってしまう。そこで、何とかして子どもが何を感じ考えているかを探ろうとする。その一つが作品からの分析だ。でも、作品だけからわかることは1割程度にすぎない。わからないことの方が圧倒的に多い。子どもの作品には大人が考えもしないことが実現されている場合もある。

2. 絵に関する疑問

本作品では、傘を見下ろすというアイデア、斜めの構成など、次のような疑問がたくさん生まれた。

（1）アイデアについて

●傘を真上から見下ろした絵のアイデアは？ 経験から？ 写真や映画などの映像から？ 先生の指示？

（2）傘の形や色について

●折り畳み傘、16本骨傘などいろいろな種類の傘があり、かなり正確な作図だ。調べて描いたのか、見て描いたのか？

●どのように色を決めたのか？ 中央の傘が目立つように配色したのか？

（3）画面の構成について

●画面の全体を右上から左下へと斜めの構成にしたのはなぜか、人々の動きを表したかったのか？

●歩道のブロック、反射板、水たまり、波紋などの要素を入れたのはなぜか？ 雨粒を描かなかったのはなぜか？

●真ん中の傘だけ赤い靴が見えている。構成上のアクセントか？ それとも傘を差すおもしろさや雨靴を履く楽しさを表したかったのか？ 他に伝えたいメッセージはあるのか？

（4）指導について

●授業中の作品か？ 夏休みの宿題か？ 美術部か？

●先生と描き方について相談したか？

3. 疑問への答え

疑問に対しての作者の答えは以下である。

（1）アイデアについて

当時、私は美術部が出品する展覧会のために、傘の形や特徴を題材にした絵を描こうと考えていました。どこから見た傘がいちばんおもしろいだろうと想像し、上から見た傘を選びました。

（2）傘の形や色について

同じデザインのものを描くのがつまらないなと感じたので、学校にあった忘れ物の傘を数本借りて、友達に傘を差して下を歩いてもらいました。それらをもとにコンパスと定規を使って下書きをしました。

配色は、塗りたいと思った色そのまま塗りました。中心は目立つたほうがきれいかなと思ったので濃い赤にしましたが、その他はモデルにした傘の色をまねたりしました。

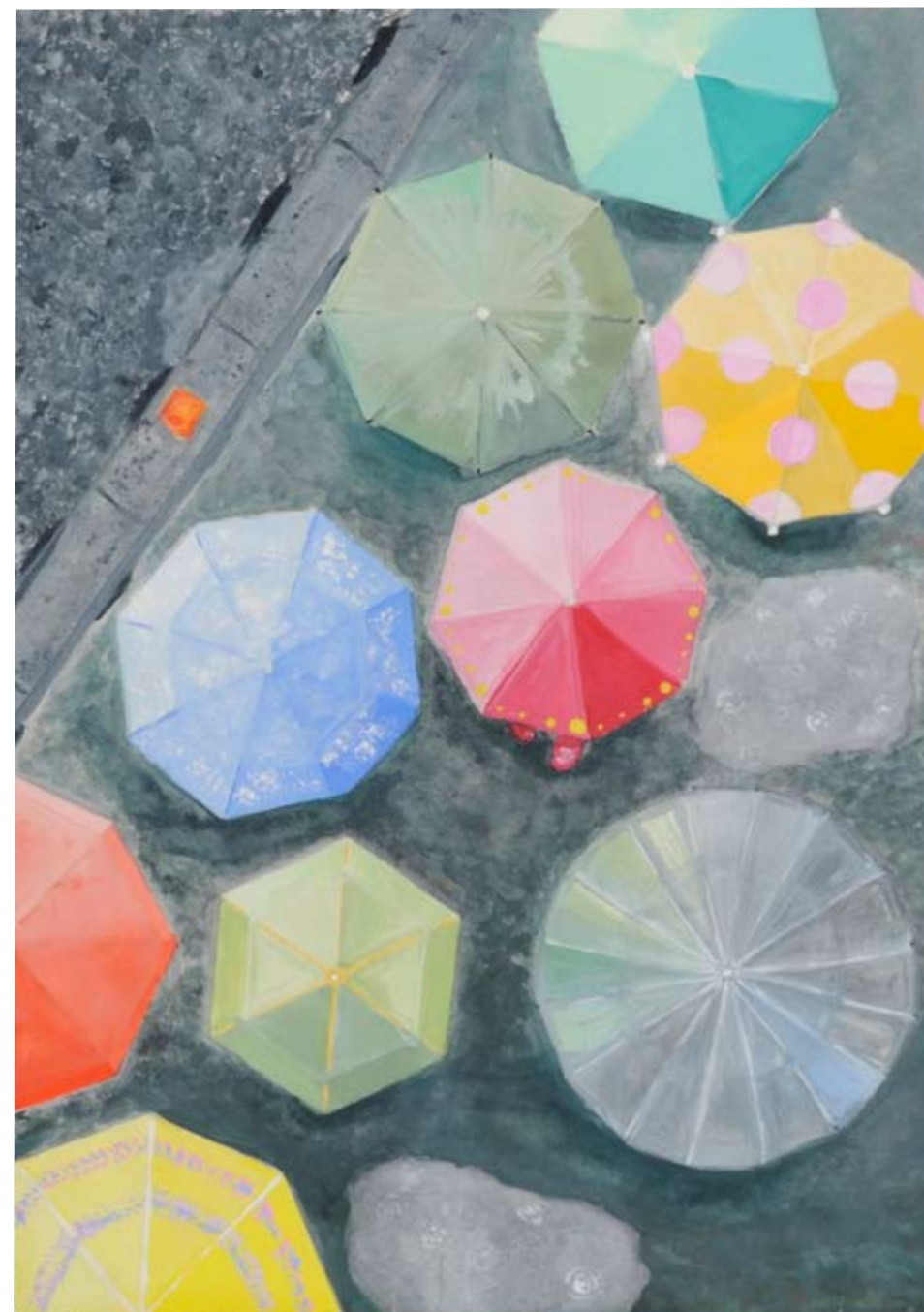
（3）画面の構成について

あえて雨粒を描かずに、雨が降っている表現をしたらおもしろいと思ったので、傘、水たまり、たくさんの小さな波紋を描きました。地面はアスファルトの歩道と車道です。通学路の上から見た様子を想像して描きました。私の描いてきた絵は大体斜めの構図になっています。「縦か横」と決めつけたくないからでしょう。

（4）指導について

ほとんど塗り終わってから、先生にアドバイスをもらいにいくと、「この人たちはどっちに向かって歩いて

いるの」と聞かれました。私は右上から左下に歩いているイメージだったのですが、先生は「逆に見える」と言いました。そこで、靴を描いて進んでいる方向を示そうと思いました。すると、赤い傘の女の子だけ逆行しているような絵になりました。でも、そのほうが意志をしっかりとっているみたいでかっこいいなと思いました。



「傘」
紙、水彩 27.8×27.8cm
『美術2・3上』P15に掲載

4. 作品と答えからわかること

配色に見られる中心という概念、構図、想像と観察と作図でつくり出された傘のリアリティなど疑問は全て解決した。そしてこの子が、自分の表したいことをもとに、できつつある画面と相互行為を繰り返し、友達や先生とコミュニケーションしながら制作し続けたことがわかった。

何より、実に論理的だった。「絵は感性」とよく言われるが、作品の制作は、自分の行為や感覚をもとに、知識や技能、経験などを駆使し、思考や判断を繰り返しながら、何が必要な要素かを選び出し、これを論理的に組み合わせ、自ら価値をつくり出していくという知的な作業だ。本作品と作者の説明は、そのことを見事に証明していると思う。

美術部へようこそ! ● 栃木県おやま小山市立小山中学校

栃木県南部に位置する小山市。豊かな自然に囲まれた小山中学校の美術部は、毎年、運動会のために大きな横断幕を共同制作します。今回はその活動を中心にお伝えします。

巨大な横断幕の制作

校庭のバックネットに縦3.6メートル、横7.5メートルの巨大な幕が掲げられる。小山市立小山中学校の運動会では、毎年、美術部が制作した横断幕を飾るのが恒例となっている。幕は運動会でいちばん目立つ存在として、訪れた地域の人たちがその前で記念撮影したり、クラスごとの集合写真の撮影が行われたりする。「最初に幕を制作したのは7年前。徐々に根づいていき、今では『今年はどんな図柄なの?』と、楽しみにして下さる方が多く、励みになっています」と話すのは、顧問の佐藤かおる先生。毎年、9月の運動会に向けて、夏休みの部活動はすべて幕の制作に充てる。図柄は年ごとに変わり、今年は富士山が世界遺産に登録されたことにちなんで、日本の世界遺産をテーマにすることに決めた。

「OHPを使って、下絵を拡大投影し、大きな布に図柄を写していきます。真夏にカーテンを閉め切って作業するので、汗だくになって大変なんです(笑)」と、3年生の部員が教えてくれた。3年生にとっては、3度目の制作。リーダーシップを発揮し、後輩に丁寧に指示を出しながら、てきばきと作業をこなしていくそうだ。「つくるのは大変だけど、運動会で自分たちが制作した幕を見るとすごく誇らしい気持ちになりま

す」と2年生の部員はうれしそうに話していた。

活動を外へ発信する

美術部は運動部と違って、大会などがないため、成果が見えにくい。だからこそ、佐藤先生は美術部の活動を外へ発信する場を大切にしたいという。「そこで、褒めてもらったり応援してもらったりすることが、生徒たちの自信につながるんじゃないでしょうか」。

横断幕の制作以外には、正門の脇に掲示する「月の予定表」を制作するのも、美術部の役割だ。毎月、季節に合ったモチーフを選び、色紙や絵の具を使って、かわいらしい予定表をつくる。また、職員室で使われているペーパーウェイトも美術部員の手によるもの。学校のあちこちで、美術部の活躍を見ることができる。「教師から『こういうものをつくってもらえない?』と美術部へ依頼することも多い。みんな、美術部へ期待をしているんですよ」と濱口隆晴校長は笑顔で語る。

校内の制作以外には、益子町ましこへ行って焼き物をつくったり、東京の美術館へ出向いて美術鑑賞を行ったりもする。「本物」に触れてほしいという、佐藤先生の思いからだ。

現在は文化祭の作品制作の真っ最中。放課後の美術室からは、今日も部員たちの明るい声が響いていた。



今年の幕は、富士山、白川郷など日本の世界遺産をテーマに制作された。現在の部員数は20名だ。



左／文化祭に向けて、作品のアイデア出しをする。アットホームな雰囲気笑顔が絶えない。
右／生徒たちが制作した益子焼。その完成度の高さに驚かされる。



撮影 鈴木俊介

野外造形展は楽しい

とよた子ども造形フェスティバル

愛知県豊田市で毎年野外造形展が行われています。スタジアムにずらりと並ぶ子どもたちの作品は圧巻。その模様をお伝えします。



サッカーをはじめとして、さまざまなスポーツの試合が開催される豊田スタジアム。普段はスポーツファンが集まるこのスタジアムに、毎年秋にはたくさんの親子連れの姿が見られる。その視線の先には、子どもたちがつくった数々の作品がある。

愛知県では、多くの地区で野外造形展が行われている。その一つが、豊田市の「とよた子ども造形フェスティバル」である。第30回(2010年)より、豊田市美術館前の枝下公園から豊田スタジアムへと会場を移した。市内の小・中学校や特別支援学校、こども園、幼稚園、保育所の子どもたちがつくった全作品を展示している。スタジアムの外周を一周するように作品が並び、ゆったりと鑑賞できるのがこの造形展の特徴だろう。

展示されている作品の中には、普段の生活で使いたいと思わせる

ものが多い。ヒノキを素材にしたランプシェード、お気に入りのCDを飾る椅子型CDラック、木彫のフォトフレームなど、ずっと使い続けたいような作品が所狭しと並んでいる。

会場に訪れる人々は、自分の子どもや孫の作品、あるいは近所に住む子どもの作品を見つけて会話を弾ませている。子どもたちが作品に込めた思いは、地域に元気を届ける。「とよた子ども造形フェスティバル」は今年で33回目。これから先も、子どもたちの思いをのせて、野外造形展は楽しく続いていくだろう。

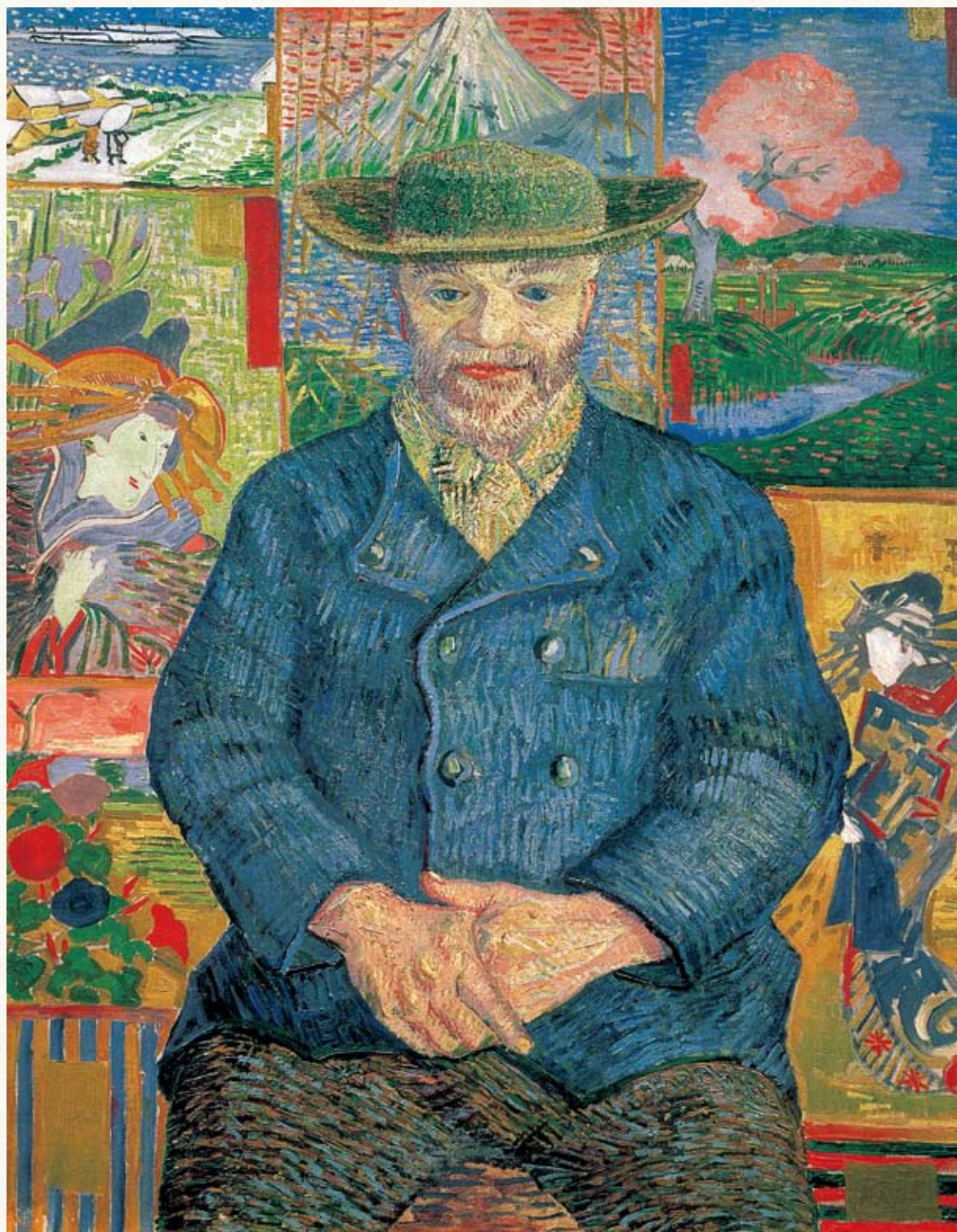


自分の制作した作品を保護者と
いっしょに見つめる児童(2012年10月)。

放課後

第4回

ART



第 4 回

「タンギー爺さんの肖像」

フィンセント・ファン・ゴッホ

キャンヴァス,油彩 92×75cm 1887～88年 ロダン美術館蔵 (フランス)

Photo:The Bridgeman Art Library / DNPartcom

背景も主張する

ゴッホが生まれたのは江戸時代でした。1853年(嘉永6年)日本では黒船襲来として記憶されている年です。

「タンギー爺さんの肖像」が描かれたのは1887年(明治20年)ゴッホ34歳。この3年後にはもう亡くなっているんですね。

やさしい目をした、実直そうなお爺さんの背景に、日本の浮世絵がたくさん貼ってあります。タンギー爺さんは、貧乏な若き芸術家たちに理解のある、画材屋さんであり画商でもありました。

そうして、当時大人気の浮世絵のコレクターでもありましたから、あるいはこのまんまがお爺さんの店先の様子で、この絵は単なるリアリズムであるとも考えられます。しかしもし、この絵の背景が黄色一色だったらどうでしょう。

ゴッホは、どうしてもこの浮世絵をバックに描き込んだ絵を描きたかった。ゴッホにとって浮世絵は憧れ

でした。自分の目ざしている「新しい絵」の発明のキッカケでした。

日本の浮世絵は、どうしてそんなにヨーロッパの画家たちにショックを与えたのでしょうか。それは、自分たちとはまったく違った文化が、まったく違った絵の描き方を生み出していて、しかもそのクオリティが自分たちが作り上げたものと肩を並べる到達をしていたということへの驚きだったでしょう。

どちらが上とか下とかではない。まるで違っているところに、画家たちは刺激されたのです。

同じことは日本でも起きていました。葛飾北斎や歌川国芳、平賀源内や高橋由一は、まったく自分たちとは違う考え方で描かれた西洋の絵に驚きました。

しかし、ゴッホもそうであったように、自分たちのもっているものを、かなぐり捨てて、すっかり宗旨替えをしたのかといえそうではないの

です。

高橋由一は油絵で、焼き豆腐と油揚げを描き、鮭やおいらんを描きました。北斎は西瓜の上に薄紙をのせて菜切り包丁を添えた写実画を描いています。

ゴッホも何枚かの浮世絵の模写を描いたあと、アルルに自分の「日本」を見い出します。

絵の中に絵が描いてある。いわゆる画中画にはたくさんの先例がありますが、この絵のようにみずからの信念や理想の宣言みたいな意味をもたせた画中画は珍しいでしょう。

ゴッホは、いわゆるゴッホらしいスタイルを発明しただけでなく、そもそも絵描きを目ざして描きだしたその当初から、絵というものにとてつもない希望を託していた画家でした。同じように日本の浮世絵に刺激を受けた他の画家たちとゴッホの視線はあるいはまるで違っていたのかもしれない。

イラストレーター。
1947年東京都生まれ。
漫画雑誌『ガロ』編集長を経て、
イラストレーター、エッセイスト、装丁デザイナー。
著書に『モンガイカンの美術館』(朝日新聞社),
『のんき図画』、『ねこはい』(以上、青林工藝舎),
『本人伝説』(文藝春秋),
『オレって老人?』(みやび出版)など。

南 伸坊
みなみ・しんぼう